

「今日の説教、聴き手のために」 2009/2/1 明治学院教会(143)

(このプリントは毎週作っているものです)

岩井健作

「生きて働く言葉」

テサロニケ I 2章13節-16節

「事実、それは神の言葉であり、・・・現に働いているものです」(13)

- 1、プロテスタント教会の礼拝は「説教(宣教、主の福音、証言、告知などとも言われる)」を中心におく。良い意味でも、悪い意味でも、「言葉の宗教」である。その「説教」の聖書の箇所・テキストはどの様にして決められているのか。
- 2、礼拝説教のテキストの選定は多くの教会では、説教者に委ねられる。ある教派では、教会暦で決まっている。大方の決め方はほぼ三つある。私の場合も三つを組み合わせて用いて来た。第一は、教会暦・聖書日課を用いる。(教会暦は一般暦[季節暦、生活行事暦]に対して、信徒の信仰生活のために配慮をして作って来た伝統的な年間の暦。待降節、降誕日、受難節(レント)、復活祭(イースター)、聖霊降臨日(ペンテコステ)、三位一体主日、)他、教会行事歴が入る。第二は自由選択。メッセージの発信者としての「教会」(説教者)が、状況(聴衆)との関わりの中で自由に、時に応じてテキストを選択する。主題説教となる。第三は、連続講解。聖書を構成する各文書の一つを選び、連続して講解(exposition)する。テキストの歴史的な文脈を明らかにし、それを現代の文脈(コンテキスト)で解き明かすという方法である。地味だが、一番よく用いられている。
- 3、説教の本質は、聖書テキストについての解き明かしが「神の言葉」として受け入れられること。説教者自身は欠けの多い器。「わたしは汚れた唇のもの」(イザヤ6:5)。「ああ、わが主なる神よ、わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎません」(エレミヤ1:6)といえる。説教の内容は、説教者の思想や生き方の表白ではない。「福音といわれる(イエスのおける)神の出来事」を語る。「福音」として締めくくられる仕方が、既に聖書を構成している文書において多様である。例えば、マルコとパウロとは大違い。その歴史的意味を現代へと解釈する。
- 4、今日のテキストは、「神の言葉」が三回使われている。第一は「説教」のこと。「語られた言葉」。第二は受け入れられた「神の言葉」。第三は「福音の事件の繰り返しの出来事」。パウロはこのすべてを「感謝」と言う。
- 5、聖書は一つの全体であつても、同時に部分が全体を表す。田中正造が亡くなった時、マタイ福音書の分冊だけを持っていた。「義のために迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものである。」(5:10)は彼の全生涯を表している。
- 6、「生きて働く言葉」の「働く」は「エネルギー」。テサロニケの信徒には、「神の言葉」が働くもの、「命」と結び付いてたことが驚くべき事であった。
- 7、癌の闘病の牧師に、ご自身の説教を聴く事を勧めた事がある。ご自分の説教は、人の言葉に過ぎない。自画像のように、自己嫌悪を誘うものでもある。しかし、なおそれを越えて聞くものを包む言葉の力を宿している。それは説教者が教会によって立てられているからであろう。